

# 総合病院 鹿児島生協病院 医局学術誌

## 医報

Vol.14 2011.12

目

次

巻頭言.....総合病院鹿児島生協病院副院長 森下繁美..... 1

### 臨床研究

|                                                  |            |    |
|--------------------------------------------------|------------|----|
| 静脈血栓症に下大静脈（IVC）フィルターを使用した 35 例の検討.....           | 馬渡耕史.....  | 2  |
| 鹿児島生協病院における全身麻酔時使用薬の変遷.....                      | 橋元高博.....  | 9  |
| 鹿児島生協病院における NPPV（非侵襲的陽圧換気療法）のまとめ.....            | 養輪一文.....  | 12 |
| HB ワクチン加速接種法による抗体獲得状況の報告.....                    | 堀之内ルミ..... | 15 |
| 当院集中治療病床での褥瘡新規発生の要因調査.....                       | 長友健一郎..... | 17 |
| 16 列冠動脈 CT における冠動脈 CT 撮影の画像構築成功率とその規定因子について..... | 迫田真依.....  | 19 |

### 症例報告

|                                              |            |    |
|----------------------------------------------|------------|----|
| 国内発症チフス菌による腸腰筋膿瘍の一例.....                     | 川野大介.....  | 21 |
| アルコール性ケトアシドーシス（AKA）の 2 例.....                | 中村大介.....  | 24 |
| 心肺停止から生還した後、心電図の経過から Brugada 症候群が疑われた一例..... | 常森将史.....  | 27 |
| スポーツ後に急性腎不全をきたした 1 例.....                    | 中田千香子..... | 32 |
| 学校検尿では異常を指摘されずに経過し腎不全を認めた 14 歳女子例.....       | 藤崎弘志郎..... | 35 |
| 中学、高校入学後間もない時期に冠攣縮による心筋障害が生じた若年者の 1 例.....   | 山口浩樹.....  | 38 |
| 高血圧を契機に発症した可逆性白質脳症の一症例.....                  | 板井陽平.....  | 41 |

### 著書・論文

|                                                                                             |            |    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|------------|----|
| たこつぼ心筋症の病理.....                                                                             | 馬渡耕史.....  | 43 |
| 外科における SSI サーベイランスとチーム医療.....                                                               | 森下繁美.....  | 53 |
| 胎児心奇形のスクリーニング.....                                                                          | 西島 信.....  | 55 |
| 胎児循環って何？.....                                                                               | 西島 信.....  | 62 |
| The role of vascular endothelial growth factor in pediatric otitis media with effusion..... | 積山幸祐.....  | 73 |
| 頸部リンパ節に発生した節性濾胞辺縁帯 B 細胞リンパ腫の 1 例.....                                                       | 那須拓馬.....  | 79 |
| 著しく視力が改善したレーベル遺伝性視神経症の 1 例.....                                                             | 福留みのり..... | 83 |
| リファブチン関連ぶどう膜炎の 2 例.....                                                                     | 福留みのり..... | 91 |

学会発表・抄録..... 97

著書・論文一覧 / 講演・シンポジウムなど..... 106

臨床病理症例検討会（2010 年 4 月～2011 年 3 月）..... 107

投稿規定について・編集後記..... 225

## 巻頭言：論文を書くということ

鹿児島生協病院副院長 外科  
森下繁美



私は昭和 57 年（1982 年）3 月に鹿児島大学を卒業し、5 月から秋田中通病院での初期研修を開始した。福岡の両親は卒業後に鹿児島や福岡の大学ではなく、秋田の市中病院に行くと言い出した息子にあきれていた。自分としては「大学に残るのではなく、鹿児島の地域医療に外科医として貢献したい。民医連運動を素晴らしい先輩や仲間たちと行いたい」という純粋な気持ちであり、その中で民医連の外科研修病院として秋田を選んだ。とにかく臨床医として力をつけることができれば、博士号をはじめ資格などは重要ではないと県連所属医師は誰もが考え、そもそも今のよう認定医や専門医などが問題にされることがない時代であった。ただ、自分は秋田中通病院が日本外科学会の修練施設であったことも幸いし、卒後 8 年目に東京医科歯科大学での専門研修中に日本外科学会と日本消化器外科学会の認定医資格を申請して取得することができた。その時は、将来このような資格がきっと必要になるだろうと確信していたことを覚えている。

私は、来年で卒後 30 年を迎えようとしている。時は移り、今では大学はもとより市中の病院も研修医を受け入れる条件として、それぞれの診療科の研修修練施設認定が必須の時代となった。そして、その為には専門医や指導医の資格を持った医師の確保が必要とされる。数年前までは、県連内の外科医で専門医までの資格は取れるものの、指導医の資格を取ることは不可能であったが、木藤先生に鹿児島生協病院へ戻っていただいたことで、2009 年 1 月に日本外科学会修練指定施設認定を取ることができた（指導医 1 名以上、専門医あるいは認定医 2 名以上が必要）。これにより、自前で専門医と指導医を取得できる条件が整い、私には、鹿児島生協病院の施設認定維持のために、数年以内において外科学会指導医資格の取得が求められている。私は今、資格申請において学会参加や手術実績は問題ないものの「外科専門医又は認定医の認定を受けた年の 3 月 1 日付以降に刊行された学術刊行物に、5 篇以上の外科学に関する研究論文を、筆頭者として発表した者でなければならない」の項目達成に四苦八苦している。これまでに学会発表は年に 1～2 回ほどは行なってきたものの、その論文文化はほとんどして来なかった。この間、私は忙しい日常診療の合間に、怠け心に打ち克って論文を書くことが至難の業であることを痛感している。ようやく昨年、今年と症例報告であるが 2 篇の論文を外科系学会雑誌に投稿し採用までこぎつけた。合計で 3 篇となったので、あと残り 2 篇である。大変ではあるが、この間の論文作成から投稿・査読そして採用までの作業の中で、End Note の活用も含めて多くのことを学ぶことができ、臨床医としても若干成長できた気がするし、医師としての充実感も味わえた。指導医たるもの、臨床技能のみならず、学会発表さらには論文作成においても若手を指導できることが当然であると今では考えている。また、優れた臨床医になるには論文作成を軽視することはできないことも実感している。なぜなら、良い医療を行うためには、論文を書く過程におけるのと同様の論理的思考が必要だからである。現在、私たちの日常診療が可能なのは、諸先輩が経験した患者さんたちのお陰、そしてそれを科学的に考察し医学論文にした諸先輩たちの努力の賜物といえる。私たちも、学会発表したという自己満足で終わらせず、論文にすることによって、自分たちの経験を客観的に後世に伝える努力をこれまで以上にしたいものである。

鹿児島生協病院医報第 14 巻の発刊を喜ぶと共に、今後もこの医報が私達の優れた臨床医として成長するための重要な学術誌として成長していくことを願いたい。